

## 論壇

## 全国農学系学部長会議の活動

全国農学系学部長会議会長  
中嶋康博

全国農学系学部長会議（以下、学部長会議）は、令和5年度現在、39国立大学48学部等、10公立大学12学部（水産大学校を含む）、20私立大学24学部が加盟している組織です。昭和24年に大学における農学の教育研究の振興と関連産業と生活基盤の持続的発展に寄与することを目的に設立されました。当初は他学部での組織と同じように国立農学系学部長会議として発足しましたが、平成13年度に現在の公立大学、私立大学も含めた学部長会議に改組されました。春と秋に総会を開催して全加盟学部等が一堂に会して、各大学が実施している教育研究や運営の改善への取組に関して情報共有を図り、それ以外に高校生や進学指導の教員に農学の魅力と重要性を伝える取組みを行ってきました。

総会時には、4つの常置委員会が開かれて、第一常置委員会では農学系の教育に関する基本事項、第二常置委員会では農学系の研究に関する基本事項、第三常置委員会では大学・学部等の組織運営に関する事項、第四常置委員会では農学の教育研究の社会的啓発、国際協調等に関する事項について審議しております。新型コロナウイルス感染症拡大にともない、2020年度から2022年度の間はすべての会議がオンラインでの実施となりましたが、2023年になって対面での会合に戻ることになり、手探りながら、ようやく本来の活動に復帰しつつあります。総会の議題の一覧にとどまることとなりますが、今年度どのような観点から活動しているかを以下ご紹介します。

2023年春の総会（6月1日～2日）が東京都千代田区（当番校：筑波大学）で開催されて、第一常置委員会では「博士課程後期3年の課程の充足率向上に向けた取組について」、第二常置委員会では「農学分野における国際共同研究とランキング向上に関わるレピュテーション対応について」、第三常置委員会では「SDGsへの取り組み状況について」、第四常置委員会では「(1) 農学分野の輸出拡大にたいする農学系大学の国際貢献」「(2) 大学院進学者の増加につながる社会的啓発について」に関する意見交換が行われました。また文部科学省および農林水産省の担当官から情報提供と関連事業の紹介があり、それ以外に全国大学附属農場協議会（長尾慶和会長・宇都宮大学教授）、全国大学演習林協議会（久保田耕平会長・東京大学教授）、日本農学アカデミー（生源寺眞一会長）、農学知的支援ネットワーク（JISNAS）（江原宏事務局長・名古屋大学教授）からの活動報告がありました。

2023年秋の総会(10月23~24日)は松山市(当番校:愛媛大学)で開催されて、承合事項「コロナ禍での経験を教育・研究にどのように活用しているかについて」「アフターコロナの授業形態・勤務形態について」「農学系リカレント教育について・社会人に対する教育活動の実施方法について」について事前情報収集された結果が披露されました。また第一常置委員会では「アントレプレナー教育(起業家教育)の推進について」、第二常置委員会では「各大学における農学系DX研究の現状および本分野の研究者確保・育成のための課題について」、第三常置委員会では「各大学における安全衛生管理体制の実情について」、第四常置委員会では「(1)各大学の強みを活かした研究、例えば農学系分野として持続可能な開発目標「SDGs」に関する研究、をどのような方法で社会にアピールしているのか」「(2)農学系分野における国際認証(GAP認証や有機認証)や動物福祉、安全保障輸出管理や名古屋議定書等の国際的な知識や資源の移動の管理について、各大学の取り組みの状況や工夫がどのようになされているか」に関する意見交換が行われました。そのほか春の総会以降の状況について、文部科学省および農林水産省、全国大学附属農場協議会、全国大学演習林協議会、農学知的支援ネットワーク(JISNAS)からの情報提供、活動報告がありました。

この日本農学アカデミーの会報では、学部長会議についての前回の報告を平成30年冬に行いました。その際の加盟校数と比べると、国立大学は1大学2学部、公立大学は1大学2学部、私立大学は4大学3学部増えております。伝統的な農学系の学科を基礎としながら、環境科学、生物資源科学、生命科学、食マネジメントなどの分野へと展開して、新大学、新学科の設置も相次いでいます。学部長会議では、そのような新たな組織化の中での課題を共有して検討を続けております。

総会における文部科学省の担当官からの報告にもあったのですが、社会の急速な変化に対応して、農学系教育・研究がデジタル化・グリーン化など成長分野へ貢献することが期待されております。農学系学部がもつ多様なフィールドは他分野とは一線を画す貴重な教育・研究資源であることは間違いありませんが、コロナ禍ではその運営において多くの困難に直面しました。しかしながらすべての大学でDX化を活用しながらこれらの課題を乗り越えてきており、多くのグッドプラクティスが積みあがっております。今後は農学分野の融合をさらに強化し、文理複眼的な思考力をより一層育みながら、教育・研究の深化に取り組み、社会に対して農学の存在価値を高めていく必要性が認識されたところです。